

第 I 部

教職を目指す学生へ

教員採用合格者の経験を聞く

— 2016年度「教員採用試験合格者の体験を聞く会」の記録 —

仲間とつかみ取った合格

上野 貴裕（文学部日本文学科4年）

私は今年の春から神奈川県の県立高校の国語科の教師として働きます。今、この文章を読んでいる皆さんは、一年前の私のように多くの不安を抱えていることと思います。少しでも皆さんの力になればと思い、私の教員採用試験の日々について書きたいと思います。

1. 模擬授業の練習方法

受験を終えて、一番に痛感した事は模擬授業の重要性です。神奈川県は模擬授業の出来で、合格が左右されると言っても過言ではありません。はじめ私は、塾講師の経験から「授業なんて、練習しなくても出来る」と思っていました。しかし、3年生の2月頃、実際に仲間の前で授業してみると全く上手く出来ずに、その自信を簡単に失ってしまいました。練習を行う度に、自分では分からない、「話し方」、「振る舞い」、「声の大きさ」などの点についてアドバイスを受け、少しずつ改善して堂々と人前で授業できるようになりました。この事から何を伝えたいかという、「授業は実際に人に見せることが大切である」ということです。授業案をしっかりと考えていても、生徒目線でないと感じる点がたくさんあります。ですので、お互いにアドバイスし合いながら、仲間と練習することが、いい授業を作る一番の近道であると実感しました。

2. 受験勉強の流れについて

私は、3年生の11月から、勉強に取り組みました。学祭期間が終わり、周りも就活に切り替わる時期だったので、自然と切り替わる事が出来たと思います。「彼を知り己を知れば百戦殆からず」という言葉があるように、まず相手を知る事が大切だと考えたため、過去問を三年間分解くことから始めました。そして一年間の勉強計画を立てました。教職教養・一般教養では、頻出単元と出ない単元の量の違いがはっきりしているので、その違いをしっかりと自分の中で確かめることが大事です。要点がまとめられている問題集を一回全て解き、重要なところは三回、四回と繰り返し、覚えるまで何度も繰り返し解く学習法を実践しました。次に専門教養の勉強法に関してですが、神奈川県の特徴として、問題がとても難しい上に、時間も少ないという傾向があり、点数を安定させる事が第一の課題でした。ですので、全滅する恐れがある「文章問題」よりも、暗記すれば解ける「知識問題」を確実に解けるよ

うに、漢字、四字熟語、慣用句、難読語を重点的に取り組みました。特に漢字に関しては、漢検準1級の問題集を2ページ、勉強が始まる前に解く事を習慣化していたので、無理なく勉強する事ができました。漢字や難読語などに力を入れるのは、周りの人から見れば、非効率だと言われるかも知れません。しかし、取れる問題を確実にとるという事は、私にとって試験中の安心感につながり、落ち着いて問題を解けたので、結果的に点数以上の効果があったと感じています。このように、自分の弱点をカバーする方法を考えることが大事だと私は思います。

3. 受験期について

教員採用試験は就活の時期より長引きます。ですので、周りのみんなが続々と就活を終えていく中、取り残されたような気持ちになることがあります。そんな時に支えてくれたのが一緒に頑張ってきた仲間でした。「絶対に受かる」と励まし合いながら頑張ってきた日々は、私にとってとても大切な日々であったと実感しています。教員採用試験は決して一人では戦えません。仲間と共に支え合いながら夢にむかって頑張ってください。

早め早めの対策を！

豊岡 慎（文学部日本文学科4年）

私は、今年の春から千葉県の公立高校で勤務します。ここでは、私が教員採用試験を受験するにあたって取り組んできたことをお伝えします。

1. ちば！教職たまごプロジェクトでの経験

この「ちば！教職たまごプロジェクト」（以下たまプロ）とは、千葉県の教育委員会が取り組んでいる、将来教職を目指す学生の育成のために行っているインターンシップです。

主な内容は研修校先での授業見学や部活指導、講師を招いての研修会・発表会などです。

このたまプロを通して学ぶのは、生徒とのかかわり方もそうなのですが、それ以上に、教職とはどのような仕事なのかということの総合的理解です。皆さんが必ず経験するであろう教育実習では主に授業の方法や、生徒とのコミュニケーションの取り方をメインに学ぶと思います。しかし、このたまプロでは教員側の視点に立ち、その学校の校務分掌のもとにどのような業務を行っているかを、現場の空気を感じながら学ぶこと

ができます。そのため、教育実習よりもリアルに教職に対する理解を深め、やりがいを感じることもできると思います。この経験は教員採用試験の合格に直接関係しているとは思いませんが、得られた教職に対する理解や知識は生きたと感じています。みなさんも上記のようなインターンシップやボランティア活動にはアンテナを張り巡らして、積極的に取り組んでください。

2. 教員採用試験対策

私は、私立校と千葉県教員採用試験を受験しました。以下では、私が行った千葉県対策の勉強法と、私立対策の勉強法を述べます。

まず千葉県対策の勉強法です。千葉県の教員採用試験は1次試験と2次試験があります。1次試験は全てマークシート式の筆記試験と、集団討論です。筆記試験の内容は、教職教養と専門教養（現文・古文・漢文・学習指導要領）についてです。これは市販の参考書と過去問に取り組んでいけば特に苦勞することはないと思います。それよりも、集団討論や2次試験の模擬授業や個人面接の対策に時間を割くことをお勧めします。面接の内容などは教職課程センターで詳しく調べることができます。また、実習室を借りて面接の練習や模擬授業の練習もできます。こちらも積極的に利用して自分のスキルアップを目指しましょう。

私立対策については、専門教科と論文の対策をしましょう。大学入試に向けて学習していた内容をしっかり復習してください。また教職に関する小論文の書き方なども対策をしましょう。

総じて言えることは、とにかく早め早めに準備を進めておくことです。

東京都の未来の担い手を育てるために

M・Y（文学部英文学科4年）

私は東京都の教員採用試験に合格しました。校種は中高共通で、教科は英語です。これから私の勉強方法や対策の仕方についてお話したいと思います。東京都の場合、専門科目、教職科目、小論文の3点が出題されるため、一般教養がない分、他県よりは学習範囲が狭いかもしれません。

私が教員採用試験の勉強を始めたのは、3年生の12月からでした。サークル活動を行っていたため、冬まで勉強に手をつけることが出来ませんでした。サークルを引退した後、書店に行って教職教養の参考書を購入し、教職の専門知識や単語などを学習し始めました。参考書を何度も読み、ノートに繰り返し専門用語を練習するなど、暗記する際に工夫をしました。また、3年12月から教職課程センターが主催する勉強会に参加し、自分が学習した点を、過去問を解くことで復習

を重ねました。教職教養については、学習指導要領、教育基本法、学校教育法をよく読み込み、瞬時に何条の何について述べられているのか、空欄補充にまで対応できるように対策を進めておくことが大事かと思います。

3月まではこれの繰り返しで、専門科目の学習を本格的に始めたのは4月からでした。過去問は繰り返し解き、分からない問題は友達と相談しながら解き進めました。専門科目は、教職課程センターの貸し出しテキストをコピーしながら、過去問に取り組みました。私は、専門科目の点数に伸び悩み、試験直前も5割ほどしか取れていませんでした。読解しにくい文章ばかりですが、英検で言えば、準1級から1級程度の単語なので、英検対策の参考書に載っている短い文章を繰り返し読むなどして学習を重ねることで力がついたと感じます。

次に、小論文についてです。小論文は、12月ごろから教職課程センターの木村先生にお世話になり、自分で論題を持ち帰り、執筆し、先生に添削をお願いする工程を繰り返していました。2週間に1本は必ず小論文に取り組むことを心がけ、多いときは週に3本は書いていました。最初のうちは、論旨が論題に沿っておらず、起承転結がない論文でしたが、何度か練習していくうちに論文執筆の型が決まり、自分のスタイルで色々な論題に取り組むことが出来ました。

次に2次試験の面接についてです。私の場合、面接対策は直前まで行っていませんでした。面接も教職課程センターで練習しました。早い内から、対策しておくほうが色々な質問に慣れることができ、緊張が自信に変化すると思います。集団討論では、相手の主張を真っ向から否定するのではなく、相手の考えを汲み取り、自分の意見を述べた上で、受け答えをすることが良いと思います。実際の試験の雰囲気は、集団討論、個人面接試験では面接官が3人いました。なぜ教員を志望するのか、目指し始めたきっかけや教員の魅力、どのような教育を行いたいのかなど質問の内容は多岐にわたります。場面指導についての質問ではかなり苦戦しました。「学校近くのコンビニエンスストアから生徒が騒いでいるという苦情」「教室内で著しく騒いで授業妨害する生徒への対応」といった基本的な質問でしたが、焦りもあってかしっかりと受け答えが出来ず、かなりの圧迫を受けました。どのような状態でも、めげずに、自分の意見を言える自信や派生質問を最大限研究して、どんな問題でも、しっかりと捉えて返答する意志をみせることが大事だと思います。

本番で後悔しないためにも、早めに勉強に取り組み、試験対策をしてください。応援しています。

教採に向けての日々の取り組み

野崎 洋平（文学部史学科4年）

・合格に向けて

私は昨年夏埼玉県教員採用試験・高校地理歴史を受験し、合格することが出来ました。合格までの経験をお話いたします。

私は3年の夏ごろから徐々に勉強を始めていきました。ただ、12月ごろまではサークルの演奏会等がある関係で、週末の予備校通いと通学時間などを利用した1日2時間程度の専門科目の勉強をしていました。勉強を本格的に始めたのは演奏会が終わった12月からで、大学の図書館で最低でも8時間は勉強していました。

予備校は3月まで通っていましたが、週末に面接などの人物対策を行うのみでした。予備校で様々な人の面接や、面接のテクニックを聞いたのはためになりましたが、予備校に行かなくても、教職課程センターで先生や友達と練習するので十分だと思います。ただ、早い段階から面接練習の数をこなしていたということはとても役に立ったと思います。

私が合格で役立ったと思うのは、授業で教育哲学者ジョン・デューイなどの教育実践についてディベートしたことです。アクティブラーニングの理解につながると思うので、様々な教育方法を取り上げて友達と話したりするのいいと思います。

・自己分析の大切さ

各県の試験では、人物重視の傾向が高まっており、合格するために面接官の印象に強く残るような面接をする必要があります。そこで、良い面接をするために必要なのが自己分析です。

自己分析をするにあたって、まず、自分はどんな教員になりたいのか？なれるのか？を考えることが大切だと思います。例えば、私はリーダーシップを発揮するような力はないと感じたので、生徒に寄り添えるような先生になりたいと考えました。自分の長所と繋げて考えるといいと思います。次にそんな先生になるために自分は何をしてきたのか、整理してみましょう。教員になるために努力してきたことがきっとあるはずです。ちなみに、私は試験を迎えるにあたって、教育に関するボランティアや教育実習の経験がなかったので、サークルやオープンキャンパススタッフ・学科の研究・高校時代の部活のことなどを面接で話しました。教育の経験があったほうが良いのは間違いないですが、日ごろの活動にどれだけ教育的な観点をもって、参加してきたかが大切だと思います。

そのような活動や自己分析、質問の受け答えなどを私はノートにまとめて友達と練習するなどしていました。ノートにまとめるのは強くお勧めしたいです。自

己分析にも繋がり、教育観の整理にも繋がっていいと思います。

自己分析という点では、志望理由をもう1度見直してみてください。私の場合は歴史教育に対する強い思いや、生徒の可能性を広げる教育をしたいという強い思いがありました。そんな教育を行うために、日々の活動に取り組み、面接等でその思いを伝えられたのが、合格した要因だと思っています。皆さんも頑張ってください。

教員採用試験は教師になるための研修

古谷 真（文学部地理学科4年）

私は、公立と私立どちらも受験しました。公立は2次試験で残念ながら落ちてしまいましたが、私立学校に内定しました。教員採用試験を受ける上で、私が行ったことや考えたことを記述していきたいと思います。

1. 教員採用試験に向けた心構え

公立の専門科目（私の場合は社会）は、大学のセンター入試レベルの問題が出題されます。これらを勉強することはとても大変だと思います。私自身は、これらの勉強を教員採用試験のための勉強と考えるのではなく、教師になって生徒に教えるための勉強だと考えていました。試験のためでなく、生徒に教えるための勉強と考えることで、やる気や向上心がでたので、参考にしてほしいです。

勉強方法は、高校生向けの参考書を読み込み、その後問題集を解くというやり方です。また、一日の中で必ずどの科目にも目を通すようにしました。

私は、公立の試験を受けた後に私立の試験を受けました。その時に感じたことは、公立の試験勉強は私立の勉強に繋がる、ということです。教師になるための勉強や知識に公立と私立の違いはないと思います。公立の試験勉強を頑張ることは、私立の試験勉強を頑張っていることと同じです。ですので、公立がダメだった時でも焦らず私立に向けて取り組んでもらいたいです。

2. 一人にならないで

教員採用試験に向けて勉強する期間やその後、私立学校を受験するまでは1年近くあり、一人で頑張ろうとすると心が折れてしまいそうになる時もあると思います。そんな時に支えてくれる味方がたくさんいます。

まずは、同じ教科の仲間です。私の場合は教職課程センターの自主学习サークルで知り合った仲間でした。同じ教科の仲間は、勉強方法を共有したり、模擬授業の相互参観をしたり、一緒に勉強したりと協力して励まし合いました。また、公立の教員採用試験の休憩時間に、一緒にお昼ご飯を食べるなど、試験当日も心強

い存在でした。

次に、教職課程センターの先生に紹介してもらった学校ボランティアの仲間です。教科はそれぞれ違いましたが、自分と同じように教員採用試験に向けて頑張っている仲間との会話は励まされることが多かったです。

そして、最後に教職課程センターの先生と職員のみなさんです。とてつもなく不安になった時に、先生に相談をすると優しく励ましてくださり、前向きな気持ちになることもありました。また、私立の募集情報は職員のみなさんが丁寧に教えてくださりました。

このように、いろいろな所に心強い味方を見つけることができると思います。一人で集中して勉強をする時間はとても大事ですが、一人になりすぎることなく、周りにいる仲間と協力して教員採用試験を乗り越えてほしいと思います。

覚悟を決めて

吉村 聡（経済学部経済学科4年）

私は、神奈川県高等学校・地理歴史科の教員採用試験を受験し、合格を頂くことができました。本稿は、一次試験、二次試験に分けて、私が行った準備の仕方をご紹介します。

①勉強の開始時期

私が、教員採用試験の勉強を本格的に始めたのは、大学三年の二月からです。はっきり言うと、圧倒的に遅かったと思います。ぎりぎりまで就職活動を行うか迷っていたこともあり、大学の秋学期試験の終わりに、ようやく教員採用試験一本に絞り、勉強を開始しました。私自身、高校・大学と推薦での受験だったので、不安だらけでしたが、すべてを懸ける覚悟をもって取り組んだので、三年生の終わりからでも何とかなったのかと思います。

②自治体研究

自治体研究に関しては、大切だと思いますが、個人的には、出題傾向に囚われ過ぎない方がいいと思います。例えば、神奈川県教職教養では、教育史に関する問題の出題は少ない傾向にあります。しかし、出題されている年も数年に一回程度あり、決して出ないというわけではありません。そういった意味で、出題傾向に捉われ過ぎず、どこが出ても答えることができるといったスタンスで臨む方が理想的と感じます。

③一次試験

受験をするにあたり、私は、東京アカデミー等に通わず、独学で受験しました。また、自分を追い込むといった意味でも、勉強を始めようと決めた二月の頭でアルバイトを辞め、ほぼ毎日家にこもり勉強をしてい

ました。朝の五時から夜の十一時まで、食事休憩の時間を除いて毎日十六時間ほど勉強をしていました。具体的な勉強方法を話すと、専門教養である日本史、世界史に関しては出来事の年代をほぼすべて暗唱できるくらいまで覚え、もう一つの専門教養の地理、一般教養、教職教養に関してはテキストの重要事項をすべて暗記し、その後、問題集を解いていく中でわからなかった部分、不安な部分を付け加えて覚えていくようにしました。上でも書きましたが、教員採用を受けるのには相当の覚悟が必要です。多くの人が、七月の教員採用試験本番の前にか月の教育実習があり、その期間は一切勉強ができないものと考えてください。ですので、実習が始まる前までには、仕上げる気持ちで勉強を進めた方がいいと思います。一次試験に関しては自分の努力が顕著に出ます。是非、後悔のないよう一杯勉強をしてください。

④二次試験

二次試験に関しては、ほとんどの県で面接・模擬授業がメインです。これは自分一人でやるのには限界があります。私は、高校の同級生で教員採用試験を受ける友達と、一緒に対策を行いました。一次試験の結果発表後から、試験までの一か月間、家の近くの地区センターの会議室を一日四時間借りて、お互いに授業と面接を行いました。面接は、自分の中の芯を大切にしながら、何度も練習を重ね、自分の伝えたいことを明確に伝える練習をしていました。模擬授業は、神奈川県ではテーマが発表されるので、そのテーマの意味を考えながら、友達とアドバイスを出し合い授業の形を作り、練習を重ねた後で、教員採用試験と関係のない友達に見せ、アドバイスをもらったりしました。友達に見てもらうことで、自分の癖を指摘してもらえます。私の場合は、話しながら体が左右に揺れてしまう癖があり、そういったところを指摘してもらうことで、全体的に堂々とした雰囲気を感じてもらえるようになりました。

⑤最後に

教員採用試験は、一次試験が七月、二次試験が八月の都道府県がほとんどです。つまり、周りの友達の就職先が決まっていく中で、勉強を続けていかなければなりません。不安な気持ちになることも多くあるとは思いますが、終わった後で後悔をしないように全力で挑んでください。

社会人一年目の合格

N・Y（社会学部社会学科 卒業生）

私は社会人1年目の今年、大阪府・中学社会の教員採用試験に合格しました。大学4年次では二次で不合

格となり、卒業後は東京の小学校の支援員として勤務していました。中高の採用試験は(特に社会・体育の)倍率が高く、現役で合格することは簡単ではありません。ここでは一年遅れて採用された者として、教採合格へのポイントを伝えていければと思います。

◎大学卒業まで

不合格の知らせを受けたあとは、冬に臨任・非常勤講師の申込みを行い、そのまま声がかかるのを待つつもりでした。しかしその頃、知人から東京都での学校支援員の試験があることを教えてもらい、面接の練習として受けてみました。そこで運よく合格し、「勤務が週4日で残業も無いので、試験勉強の時間がとれること」「支援員としては高めの給料を貰えること」に惹かれて、4月から働くことを決めました。

◎仕事が始まってから

小学校での勤務が始まってからは、戸惑ってばかりの毎日でした。私の自治体では支援員という立場そのものが新しい制度で、明確に「自分の仕事」というものが決まっていません。自分で周りを見ながら補助に入ることが求められ、初めの頃はまともに働けていた気がしませんでした。事前の予想通り残業は一切無く、試験対策は順調に進めることができたことは良かったです。

◎二度目の試験期間

3つの自治体を受験していたため、七月は筆記試験に追われる日々でした。金曜日の仕事が終わってすぐ夜行バスで試験に向かうことも二度ありました。ただ、これも支援員という比較的身軽な立場だからできたことであり、例えば常勤講師であったなら、かなり厳しかったと思います(普段の忙しさに加え、七月は通知表をつける時期なので)。

八月から本格的に二次試験(面接、模擬授業)が始まりました。夏休みにも勤務日は設定されていましたが、全て休暇を取り、試験対策に専念しました(私の自治体では支援員にも年14日の有給休暇が認められています)。その方法としては、次のように行いました。

・面接(個人)

想定される質問とその回答を紙に書いて、自分の言葉で話せるよう何度も繰り返して声に出しました。「こんなことを話そう」と考えているだけでは、意外とスムーズに話せないものです。また話す内容もありきたりにならないよう、深く考えて回答を用意しました。

・模擬授業

授業の内容も大事ですが、授業する雰囲気も大きく影響します。自分でビデオを撮って、立ち振舞いや話し方を研究しました。

◎合格発表まで

試験が終わってからは不安の毎日でした。3つ受験

していたうちの2つが先に不合格となり、精神的に辛かったです。最後に大阪府で合格が分かったときは、本当に嬉しい気持ちになりました。

◎試験に関して

合格するためのポイントとして、私が考えた事は3つあります。

①筆記対策は習慣付けること

社会科の場合は暗記事項が大量にあり、特に世界史は、大学受験で使わなかった人にとっては途方もない量に感じます(私がそうでした)。

私はとにかく、毎日決めた勉強量を確実に遂行するよう心がけました。具体的には以下の二つです。

- ・通勤で電車に乗っている間(往復二時間)は参考書を読む
 - ・職場に行く前に近くのカフェで一時間半勉強する
- どれだけ仕事で疲れていても、絶対に守りました。また、覚えにくい事項は付箋に書いて部屋の壁や玄関、職場のロッカー等に貼り、どこでも勉強できる体制を整えました。

②大人と話せるようになること

子どもと円滑な意思疎通ができることは大事ですが、試験で対応するのは年の離れた大人です。それも管理職(校長・教頭)・PTA・地域の企業の方など、様々な立場の人が試験官になります。そこでしっかりした会話をし、相手に「この人と仕事がしたい」「この人なら大丈夫」と思わせなければいけません。

そのためには日頃からある程度大人と話す機会をつくる必要があります。教員志望の学生の多くは学校ボランティア等で子どもと関わる活動をしますが、それは試験の対策というより教員になってから生きてくるもの、と考えた方がいいかもしれません。

私は幾つかのボランティア(子ども支援系)をやっていましたが、見知らぬ大人とまともに話す機会は少なく、それが昨年度不合格の原因の一つなのかも考えています。

③一般の就活からもヒントを得ること

面接での話し方、エントリーシートの書き方など、教採以外の就活から参考にしてみるといいと思います。実際に私は、願書の自己PR欄を一般の就活対策本を見ながら書いたところ、倍率7倍の二次試験(面接)を通過できました。

◎最後に

昨年試験に落ちてから今年合格するまで、本当に辛い日々でした。同期の友達どころか、一つ下の後輩までもが順調に就職していくこと。今年もダメだったらズルズルと何年も同じことを繰り返してしまうのではないかと。悩みは尽きない中、教員を諦めて他の公務員試験を

選ぼうと考えたことは一度や二度ではありません。それでもやってこられたのは、今の支援員としての毎日のおかげでした。

何度怒られてもすぐに「せんせい！」と無邪気な笑顔で寄ってくる子、自分の興味をひたすら追求して、大人顔負けの知識を持っている子。様々な子どもがいて、毎日いろんな笑いや感動がある学校現場で働きたいという気持ちは、試験に苦しむ自分を支えてくれました。

教員を目指しても、一発では通らないかもしれませんが。それでも、遠回りしたときにはそれに見合っただけの経験を得られると、私は思います。

弱音を吐ける仲間とともに

上村 尚代

(スポーツ健康学部スポーツ健康学科4年)

私が教員採用試験の勉強を始めたのは3年の11月後半でした。部活を引退するまでは他のことに集中ができず、周りより少し遅いスタートだったと思います。教員採用試験はやるのが本当にたくさんあるので、いかに自分の自治体の問題傾向をつかみ、効率よく勉強するかがポイントだと思います。

最初は何をしたいか分かりませんでした。教職課程センターに行き、先生方から東京都が出しやすい問題や、今年出そうな法律の問題などを教えていただき、少しずつ自分が今何をすべきなのか明白になっていきました。私は『らくらくマスター』という参考書と、先生にいただいたプリントをひたすら繰り返し、教職教養の知識をまずはつけていこうと勉強しました。知識が身についたら、過去問や問題演習を重ね、できなかったところは何か、なぜできなかったかなどを分析していきました。東京都は特に教育法規から多く問題が出るので、法規の問題は一つも落とさないぞという気持ちで勉強していました。

勉強していると、これもやらなきゃ、あれもやらなきゃという気持ちに襲われ、焦りも出てきますが、全部まんべんなく力を入れて勉強する余裕と時間はなかったので、毎年1、2問程度しか出されない教育の歴史については軽く勉強し、他の問題に比重をおいて勉強しました。教職教養はどこに焦点を絞って勉強するかが大切です。

1月頃から専門教養の勉強を始めました。教職教養と勉強するスタンスは変わらず、まずは東京都がどのような問題を出しているのか分析し、知識を定着させ、問題演習で力をつけていきました。東京都は学習指導要領よりも、毎年スポーツのルールや技の名称などが多く問われていたので、ルールブックを一冊購入し、

一つ一つのスポーツについて詳しく勉強しました。一次試験は覚えることがとにかく多いので、先生方に勉強するところのポイントを教えていただいたり、自分なりに過去問の分析をしたりして、時には息抜きもしながら繰り返し勉強しました。一次試験は自分が勉強した分だけ成績が目で見えるように伸びる分野です。自分の勉強スタイルを確立させ、自分の受験する自治体的をえた学習をすると良いと思います。

東京都は一次試験に論作文も課されています。論作文の勉強のポイントは、自分の教育の軸となるものをつくり、書いた文章を周りの人に添削してもらうことです。教育の軸というのは、人の論作文を読んでいる時、教職教養を勉強している時や日常のニュースを見ている時、自分ならこう思う、こういう教育をしたいという感情をノートなどにまとめて、それを論作文で書き、繰り返し仲間や先生に添削してもらいました。添削してもらうことで自分の視野も広がり、より書きたいことが明白になってくると思います。一人でやるよりも仲間と協力してやることをお勧めします。

二次試験は東京都の場合、集団討論、個人面接、実技の3つでした。集団討論と個人面接は、先ほどの論作文と同じような形で、ノートに自分の考えをまとめたり、様々な質問を書いて自分で答えを書いたりする作業をしていました。書くだけでなく、友達と話す練習をしたり、先生方に面接官として指導していただいたりすることで、本番の話し合いや様々な質問を乗り越えることができました。実技に関しては、苦手な種目については夏休みにひたすら練習をしていました。しかし、重要なのは綺麗にできるというよりも、生徒に教えるポイントを理解しているかということです。教科書で技のポイントを理解し、それができるよう練習していました。

教員採用試験はやることも多く、正直勉強などは楽しいものではありませんでした。しかし、合格することができたのは一緒に頑張る仲間やサポートしていただいた先生方、弱音を吐ける友達や家族など周りの人の助けがあってこそだと思っています。一人では途中で諦めていたと思います。一人でできることは限られていますので、みなさんも助け合い、周りの支えに感謝しながら受験を乗り越えてください。応援しています。

ひとりではつかめない合格

相磯 郁美

(スポーツ健康学部スポーツ健康学科4年)

私は今春から神奈川県高校保健体育科の教師として働くことになりました。これから私が教員採用試験

に向けて取り組んだ勉強方法や対策などについてお話したいと思います。

まず、1次試験についてです。1次試験を合格するためには受験する自治体の問題傾向をつかむことがとても重要です。私が受験した神奈川県は3つの分野から出題され、教職教養と一般教養で100点、専門教養で100点の200点満点の試験です。勉強を始めてみれば分かるのですが、3分野合わせると膨大な勉強範囲になります。これを全て勉強するのは到底間に合いません。そこで重要になるのが問題傾向の分析です。自治体により問題傾向は全く異なり、過去問を3年分見れば各自治体・分野の傾向がつかめると思います。例えば、神奈川県の場合教職教養からは、心理、原理が多く、教育史からはほとんど出題されない、などです。一般教養や専門教養も同様にどこが出されやすいかを分析してみましょう。そうすることで効率良く勉強を進めることができます。本格的に勉強を始めたのは3年生の11月頃で、私の勉強はこの分析から始まりました。

次に具体的な勉強の流れをお話しします。私の場合、過去問分析→基礎知識の勉強→問題演習(基礎→実践)→過去問を解くという流れで行いました。基礎知識の勉強はつまらなく集中して行うことができなかつたため、早い段階で問題演習に取りかかりました。毎週金曜日に教職課程センターにお世話になっていましたが、そこでは重田先生が分野毎に問題をまとめてくださったプリントをいただき多くの問題を解きました。また、東京都や埼玉県、山梨県、千葉県など神奈川県以外の過去問も解きました(教職教養は神奈川県と傾向が違うので解かず、専門教養を中心に解きました)。私は、とにかく問題数をこなすことで、基礎知識を定着させ、よく出題される問題を把握し、飽きずに勉強に取り組むことができました。もうひとつ必ず行っていたことは、間違えた問題をノートに書き写すことです。私は1問1答形式でノートに書き写していきました。同じテキストを繰り返し解くことはもちろん大切ですが、そうすると1冊解くのにかなりの時間がかかってしまいます。そのため、自分の苦手なところをメインに解けるノートを作ることをおすすめします。

2次試験は模擬授業、集団討議、個人面接の3つが同日、実技が別日にあります。また1次試験で実施した論文も2次試験の採点になります。1次試験が終わってから2次試験までは1ヶ月、合格が分かっているから10日ほどしかありません。そのため、合否が分からずとも指導書の準備や面接の準備をぼちぼち始めました。しかし、なかなかやる気が起きず本格的に準備を始めたのは合否が分かっているからでした。指導書はまず、高校時代の恩師に添削をしていただき、その後、

実習先の先生に模擬授業をみていただきながらさらに指導案を修正していきました。

面接はアルバイト先の店長にお願いしました(時間がなかったので面接の内容を良くする、考え方を变えるというより、自分の思いを自分の言葉で伝えるということを実習したかったので教育関係ではない方にお願いしました)。

実技練習は、大学の2次対策講座に参加しました。また、神奈川県を受験する仲間と実習先のマットやボール、武道場を借りて練習しました。実技が苦手な私でもなんとかこなしたので皆さんは問題ないと思いますが、大切なのは、基礎基本・ポイントをしっかりとおさえ丁寧に行くことです。(得意だからといってサラッとこなしてしまうのはあまり印象が良くないそうです)。

なにより重要なのは面接です。文章を暗記しても、真面目すぎてもだめです。少し言葉は拙くても自分の思いを素直に伝えることが1番大切なことだと思います。

今、このように合格までの道のりを振り返ってみて1次試験から2次試験までたくさんの方にお世話になったことを改めて感じています。自分1人では合格は絶対につかめませんでした。教育課程センターの重田先生をはじめとする先生方、一緒に勉強してきた仲間、実習先の先生方、たくさんの方の力を借りました。これから採用試験を受けるみなさんも1人で頑張らずに、周りの方の力も借りて、時には力を貸して協力しながら頑張ってください。

私の合格体験記が皆さんの役に立ったか分からないので、1次試験や2次試験でとった点数や、2次試験の詳細など他に気になることがあればなんでも聞いてください。みなさんの健闘を祈っています!

教員採用試験に向けて必要なこと

中村 豪

(スポーツ健康学部スポーツ健康学科4年)

教員採用試験を振り返ってみて、大切だったと感じることは、情報収集と計画を立てることです。勉強を始めようと思った時、多くの人が何をすればいいかわからないと思います。自分もわかりませんでした。そこで、最初に情報を集めに行ったところが教職課程センターでした。教職課程センターの方々は、どの参考書を使えばいいか、大まかな流れなど、説明してくれました。それをもとに、計画を立てて行くことになったのですが、まず最初にやるべきことは、過去問分析でした。誰に聞いてもそう答えます。恐らく、某予備校などでは、各自治体ごとに分析されているものが用

意されていると思うのですが、これは自分で容易に出来ます。私の場合は、5年分の問題を一通りみて、紙にどんどん書き出していきました。国語3問(漢字1、文学史2) 数学3(公式1、関数1、図形1)、のような感じです。100%正確ではないと思いますが、これを書き出してみると、一通り何が出て、何に時間を割くべきなのかがわかってきました。そして、教職課程センターで勧められたものや、知人が使っているものの中から、参考書を選びました。ここまできたら、あとはやるだけ。私は勉強を始めたのが1月ということもあり、それなりの勉強量は確保しました。

2次試験対策に関しても、情報がとても重要だと思います。実技の種目、その詳細、面接で聞かれる内容、小論文の正しい書き方など、情報収集の仕方は人それぞれかと思いますが、私の場合は、2次試験対策についても教職課程センターを利用させてもらいました。実技の詳細も、面接で聞かれそうなことなど、多くの情報を得ました。教職課程センター主催で行われた面接対策講座でお会いした現職の校長先生にも小論文の指導をしていただきました。幸い、私はさらにもう1人、現職の校長先生と繋がりがあり、そこでも有力な情報を得ることができました。特に2次試験対策は闇雲に何かをやればよいというわけではないので、正確な情報が必要です。それをもとに、計画を立てましたが、実技に関しては、教職課程センターの実技対策以外では、スポーツ健康学部で貸し出されているハードルやマット、跳び箱を用いて、2、3回練習した程度でした。実際、実技試験を受けた感想としても、ものすごく優れた人もいないので、そこまで時間を割く必要はないかと思います。

小論文に関しては、1次試験の頃から、やっていた方がよいということを知っていたのですが、私が対策を始めたのは1次試験が終わってからでした。まずは、模範解答を読むことと、基本の型を覚えることから始めました。ある程度、型を覚えたら、様々なジャンルのテーマで、また様々な文字数で書いていきました。私だけかもしれないのですが、書いていくうちに、どんなテーマでも大抵書ける内容が何パターンか出てきました。実際、本番では練習で書いていた内容とほとんど同じことを書いたので、かなり時間に余裕がありました。面接に関しては、教職課程センター主催の面接対策講座のほか、本山先生に一度ご指導いただいたのと、消防の試験を受ける友達と少し練習した程度でした。

教員採用試験の面接は、知識を問われることが多々あります。最低限知ってなければいけないことから、知っていることが有利になることまであります。私の場合は、時間に余裕があったので、知っていることが有利とさ

れる知識に関しても対策をたてました。面接はすべての質問項目を予測して、それを全て準備して挑むというのは不可能です。自分に関すること、場面指導に関すること、知識に関すること、これらはある程度まとめられたら、あとは自信を持って挑むだけだと思います。予想してない質問も、教員になりたい理由や、教員になってからやりたいこと、理想の教師像などがはっきり定まっていれば、ある程度答えられると思います。

教員採用試験対策についてつらつらと述べてきましたが、私自身、多くの方々のバックアップで、合格という結果を得ることができました。試験を控えている人は、是非、周囲の協力も得ながら、対策に励んでほしいと思います。皆さんと一緒に働ける日を楽しみにしています。

多忙な私の効率重視の試験対策

鈴木 琴 (理工学部経営システム工学科4年)

私は東京都中高数学科の教員採用試験を受験しました。私は進路を考えたとき、自分の視野を広げたいという思いから就職活動も教員採用試験の対策と並行してやろうと決めました。それ以外にも体育会ラグロス部での活動をはじめ、アルバイトも私にとっては欠かせないものとしてあり、とにかく勉強に割ける時間が少ないというのが私の実状でした。そこで私は効率重視の学習を第一に考えました。さらに教育課程センターを活用するなど周りの人の支援を受けながら、なんとか採用試験に合格することが出来ました。そんな私が実際に取り組んだことを紹介します。

教職教養

自治体によって出題傾向があるのでまずは過去問研究から始めました。例えば、この問題は教育法規の中のどの法律から出題されている問題なのかなど細かく調べました。3年次の12月中旬に5年分の過去問を見て、参考書に出たことがある箇所をチェックしました。そこだけを徹底的に覚えることにして、それ以外は全く見ていません。私は電車の移動時間や寝る前の10分を使って覚えていきました。東京都は毎年似ている問題がたくさん出題されるのでその箇所に絞って勉強するようにしました。

専門教養

過去問を見ましたが出題範囲は幅広くどの分野が出るか予想できませんでした。そこで専門はとにかく問題を解くことにしました。私は大学受験時に使用していた予備校のテキストを活用しました。愛着があるせいかやる気がでます。部活がある日は朝4時に起き、1日1問でもいいから解くことを心掛けました。4年

生になるまでに基礎を固めておくとその後がだいぶ楽になると思います。4月以降は実際に時間を計りながら過去問を解き実力をつけていきました。解けなかった分野はまたテキストに戻り復習することを繰り返し行いました。

小論文

論文の書き方が全く分からないまま教職課程センターの講座に初めて参加したのが2月でした。最初は1000字の文章も書くことが出来ず、見本を真似して書いていました。私は論文に時間を割くことが出来ずに、本番までに6題しか書いてない状況でした。試験2週間前になり急に不安になった私は、今まで書いた6題の論文のうち、添削して頂いた論文3題をほぼ暗記することにしました。試験本番ではどんなお題が出たとしても、暗記した論文を組み合わせて書こうと決めていたからです。案の定、お題と暗記していた文章がマッチするわけもなく焦りましたがそのまま用意していた文を書きました(少しは論題に合うように変えた気がします)。このやり方はお勧めしません。しかしどんな論文でも自分なりの書き方を身につけておくことは大切だと思います。

2次試験対策

東京都は集団討論と個人面接があります。集団討論はまずは実際にやってみることが大事です。これも教職課程センターが講座を開いてくれているので、参加できるときは参加しました。小金井キャンパスは教員採用試験受験者の人数が少なく顔見知りの人ばかりでした。ですから多様な人と討論できるように市ヶ谷キャンパスにも行くようにしました。色んな人と意見を交わすことで新たな考えが生まれます。いいなと思った意見はメモをとり自分のものにしていくように努力しました。

個人面接の練習も同様に一人でやったわけではありません。先生や友人に模擬面接をやってもらい、自分では気付かない悪い癖を指摘してもらいました。面接は数をこなすほど慣れてくるし自信もついてくると思います。私は就職活動で面接を受けていたのでその時の経験もプラスになりました。加えて現場で働いている教員と話しができたことも私にとってはよかったです。2次試験の前には、母校の中学校、高校を訪れ疑問に思っていることや日々の学校現場で感じていること等を聞きました。その何気ない会話が本番の面接では大いに役立つことになりました。以上の経験から2次試験対策は一人ではやらずに周りの仲間と協力することが合格への近道だと思います。

最後に、ここまで話してきたことは一つの手段であり私個人の提案にすぎません。学習の方法に正解はないので、自分にあったやり方を見つけ最後までやり抜

いてください。そして、どんなときも「絶対に教師になる」という強い気持ちをもっていればきっと大丈夫です。

仲間の支えと励まし

小松崎 俊平 (理工学部創生科学科4年)

私は東京都の中学高校の数学科を受験し、合格を頂くことができました。しかし、一次試験の筆記試験で思うような結果にいたらず、何とかぎりぎりでも通過することができた合格でした。そこで私が得た教訓はどんな結果であれ最後まであきらめず、悔いのないよう力尽くすることです。このことが私なりの教訓であり、これから何でも挑戦することに当てはまることであると思います。今回の教員採用試験を自分なりに振り返り、今後の教員採用試験を受ける皆さんにとって少しでも参考になれば幸いです。

以下では私の取り組んだ試験に向けた対策と学習法について紹介したいと思います。まず一次試験に関してですが、私の場合は一般企業への就職活動も同時に行っていました。ですから教員採用試験だけに集中して計画し学習することはできず、効率の良い学習をすることを考えました。そこでまず取り組んだのは東京都の過去数年分の「過去問」です。どの分野の問題が出題傾向として高いのか。自分の苦手分野がどこであるか。東京都の教職教養は教育法規をはじめ教育原理や教育時事などがかなり広い範囲で出題されます。専門教養の数学は、問題を分析して苦手分野のみを一般の教科書を用いて基礎を固めることにしました。不安はありましたが、十分な時間が確保できませんので数学の基礎を固める良い機会と捉え、すきまの時間を見つけて集中して学習しました。

教職教養では、教職課程センターで頂いたプリントを用いて頻出部分を重点的に繰り返し理解することにしました。その他の教育心理や教育史、学習心理などについてはキーワードをつなぐことで覚えました。私はとにかく出題傾向を意識した学習に努めました。教職課程で学んできた内容を自分なりに整理し東京都の教員採用試験対策で基礎知識を固めることに努めました。そして、小論文対策では今日の教育課題について把握すると同時にその課題について自分なりの捉え方をまとめておくことに努めました。出題の背景を理解し自分ならこのように解決していくという具体策を書くことが要求されます。特に「授業」、「いじめ」、「生活態度」に関することの三テーマをあらかじめ練っておくと良いでしょう。教職課程センターの先生方に何度も添削して頂き、中学校でのボランティアの体験談を入れるなど自分にしか書けない文章を意識しました。

一人では論文対策はできませんので、教職課程センターの先生に早めに相談し添削指導をしていただくことを勧めます。

次に二次試験対策について述べます。二次試験は、個人面接と集団討論があります。面接を対策する上で大事な点は二点あり、一つは練習し合える仲間がいること、二つは堂々と余裕をもって話すことです。面接は総合的なその人なりの人間性が出るものであり、技術的な応答である程度カバーできて、語る内容が自分のものになっていることが求められます。そのためには、人との関わりを大切にすることや相手の意見を最後まで聞くこと、それに自分の言葉を通してどのように伝えたら相手に理解してもらえるのかといった普段からの心構えが大切です。当時、二次試験の対策をしていなかった私を助けてくれたのは同期の友人でした。一週間かけて面接の流れから押さえておくべき教育時事の情報まで教えてもらいました。また集団面接では、学校の空き教室を借り、教育課題について議論をするなどして友人たちとともに対策しました。そして、本番当日は堂々とした様子で受け応えをすることだけに努めました。笑顔を絶やさず、はきはきと話すことを意識して練習を積み、面接に自信をもって臨むことができたため、緊張することがなかったのも大きなポイントでした。

最後になりますが教員採用試験で大切なのは、最後までやり抜くことと気張りすぎないことだと思います。本当に合格できるかどうか、不安に駆られながらも学習を続けているとがちがちに固まってしまう。逃げ出したくなる気持ちが強くなった時は、周りに相談して助けてもらいました。コツコツと学習を積み重ね、試験日当日はちょっとだけ肩の力を抜いて臨む。自分なりの息の抜き方もあると良いと思います。ここでの学習や学びは私の人生の経験としてとても大きなものになりました。皆さんもぜひ、自身にあった対策と学習方法を見つけ、仲間と支え合いながら教員採用試験に臨んでください。必ず、頑張ってよかったと思える経験になることと思います。

教職課程センターとの二人三脚で

今野 美沙（理工学部創生科学科4年）

私は、川崎市中高・数学科の教員採用試験に合格しました。幸い、大学推薦をいただくことができ、一次試験が免除になり、二次試験からの受験となりました。

まず、私が教師になりたいと思い始めたきっかけについて述べます。それは、高校生のときです。と言っても、ただ学校が好きで、数学が好きで、「先生になってまた文化祭やりたいなあ」程度の考えでした。その

思いだけで私は教員免許を取得できる大学を受験し、法政大学創生科学科に合格しました。周りの友人が専門の履修との兼ね合いで教職課程の履修を諦めていく中、私は諦めず単位を取り切り（まだ履修中の科目もありますが）、ついには教員採用試験に現役合格をすることができました。

もちろん、教育実習や教採の学習を経験することで、教師という職業の素晴らしさや大変さをより理解し、教師になりたいという想いはより強くなりました。皆さんにも「なぜ教師になりたいのか」を今一度考えてみてほしいと思います。教師になりたい理由（きっかけとは違う）は、必ず教員採用試験の面接で質問されます。教員採用試験合格までの道は厳しいです。自分はなぜ教師になりたいのか、また、どんな教師になりたいのか、教採の学習に取り組む前に、一度真剣に向き合う時間をつくってみてもいいと思います。そこで考えたことが最終的なモチベーションにきつとつながります。

次に、学習方法です。一次試験免除になることで、時間にも心にも余裕を持つことができました。大学推薦の存在を知ったのは、去年のこの合格者の体験を聞く会です。川崎市にもその枠があることを確認し、大学推薦を意識し始めました。大学推薦の選抜基準が川崎市では、学業成績が優秀（成績評価値）という基準があると聞いたので、大学の成績を落とさないよう期末試験の勉強に力を入れました。同時に、3年の夏休みから去年のこの時期まで専門教養の学習として、川崎市の過去問を解いていました。

具体的な学習内容をお話ししたいと思います。

・教職教養、専門教養

推薦が決まった4月までは、教職教養と専門教養の学習もしていました。専門教養では、ひたすら川崎市の過去問を解き、分からなかった問題をノートにまとめていました。教職教養では、小金井と市ヶ谷の教職課程センター（自宅から市ヶ谷の方が近かったこともあり、市ヶ谷の教職課程センターをよく利用していました。）の講座と川崎市の過去問をメインに学習していました。

・論作文

2月から教職課程センターの論文対策講座が始まったので、その時期から意識し始めました。一次試験から二次試験までの期間は短いです。一次試験が終わってから論作文対策を始めてはおよそ間に合わないです。一次試験対策と並行して二次試験対策を始める必要があると思います。しかし私も、いざ力を入れて学習し始めたのは4月からです。推薦が決まり、一次試験が免除になり、論作文が一番足を引っ張ると思ったので、一番重点を置いて勉強

しました。具体的な勉強方法として、初めに、問題と具体的な答案例が多く載っている参考書を一冊買い、答案例をそのままノートに書き写し、表現や文章構成の感覚をつかむことから始めました。そのあとは過去問やよく出るテーマについて書き、小早川先生や市ヶ谷教職課程センターの木村先生に採点していただきました。一度書き採点していただいたものを書き直した採点していただくという作業を繰り返しました。そして、自分の中で完成系と思える論作文を何個か作り、その内容に近いテーマが与えられたら、その完成系に寄せて書くようにしていました。論作文は慣れもあると思います。私は、教育実習があり、3週間論作文を書かなかったことから、少し感覚が鈍っていました。こうならないようにみなさんには、なるべく少なくとも週に一本は論作文を書くことをお勧めします。

・面接対策

全て教職課程センターで行いました。小早川先生と木村先生にお願いして、何度も面接練習をする機会があったので、実践練習はたくさんできました。一度聞かれた質問とそれに対する答えをノートにまとめていました。面接の様子を録画しておき、自分の仕草や雰囲気を見返すのも有効だと思います。一概には言えませんが、川崎市では面接は答える内容よりは、受験者の人柄が重視されていたように思います。

・場面指導対策

川崎市特有の課題かもしれませんが、ロールプレイング型で、実際に教師役と生徒役に分かれ学活の指導を行いました。事前にテーマが与えられているので、どのようなロールプレイングを行うか考える時間はたくさんありました。木村先生や川崎市を受験する友人と一緒に考え、実際に行いアドバイスをいただきました。

このように私は教採対策をするうえで、かなりの面で教職課程センターにお世話になりました。学習方法を見ていただいたりアドバイスをいただいたり励ましていただいたり、まさに二人三脚でした。これから教員採用試験に臨む方には、学習方法が分からない、やる気が出ない、漠然と不安があるなど何かしら思い悩むことがあるかと思います。周りの友人や教職課程センターに相談してみることから始めてみるといいかもしれません。皆さんのご健闘をお祈りしています。

継続は力なり

古川 達也（理工学部創生科学科4年）

私が教員を目指した理由は、子どもたちに数学の楽

しさ、実生活との関わりを教えたいと思ったからです。中学生の頃から教員という職業に関心を持ち、大学生活の中での様々な学びを通して、教員になりたいという思いがより強くなりました。

私が本格的に教員採用試験に向けて学習を始めようと思ったのは3年生の9月ごろです。まずは情報誌(教員養成セミナー等)を購入し、教員採用試験とは何かというところから始めました。何が出題され、どのような内容が問われるのかを分析しました。

基礎的な情報収集の後には、まずは自分が受けた自治体の採用試験について調べるべきだと思います。受ける自治体によって問題の出題傾向や面接内容、形態が変わります。例えば埼玉県であれば、埼玉県とさいたま市で試験内容が一部分異なるので事前に確認しておきましょう。

12月に入りましたので、すでにみなさんは受験する自治体を決めていることと思います。もちろん試験内容については調べてあるかと思いますが、まだやっていないという方は、過去数年分の過去問を入手して出題傾向を確認しましょう。埼玉県であれば教養試験のうち一般教養と教職教養の割合が2:1となっています。一般教養は主要5教科だけでなく音楽、美術、時事、ご当地問題など多様な分野から出題されます。教職教養に関しては、教育原理からの出題が一番多く、教育心理や教育史からは比較的少ないです。個人的な感想ですが、教育原理の範囲は面接対策と重複している部分が多いので早めに取り組んで知識として身につけておくと思いいます。

次に専門教養ですが、こちらもまずは過去問を解くことをお勧めします。2,3年分解いてみて出題傾向を確かめ対策を決め、学習に早めに取り組んでください。もちろん試験対策が目的ですが、これまで学んできた数学の基礎を固めることに繋がります。出題された内容が難しく解けないのか、難易度は低いが時間が足りないのかで終わらないのかなどで対策が変わってくるはずですが、数学の基礎知識が不足して理解できないのであれば、苦手分野を早めに克服することです。ちなみに埼玉県の中学校数学科の試験は、内容はあまり難しくありませんが問題数が多いので早く正確に解く必要があります。

私が使用していた参考書を紹介したいと思います。過去問については、参考書が市販されています。埼玉県庁(あるいは文書館)に行けば有料で入手することができます。その他には、筆記試験対策として東京アカデミーのオープンセサミシリーズを使用しました。また、時事問題をはじめ面接で問われることが予想できる注目されている今年の教育課題を知るために月刊教員養成セミナーを定期購読し、活用していました。

そのほかに、埼玉県教育振興基本計画や、学習指導要領も適宜読むようにしていました。

次に面接対策について述べたいと思います。面接対策で一番大切なことは「人前で実際に模擬面接をすること」だと思います。面接対策は筆記試験に比べて後回しにしてしまったり、質問内容についてまだ、自分の言葉でまとめてないために「まずは一人でやろう」と考えたりしがちです。それでは結局いつまでたっても上達しません。まずは友達と教職課程センターを利用してでも良いので模擬面接をして、今の自分には何ができて何ができないのかを把握しましょう。一人で対応できないのがこの面接です。模擬面接を受けることで、教員としての構えができてきます。

今こうしてこれまでの私の合格までの体験をお話しさせていただきましたが、反省すべきことはたくさんあります。最後に「こうすればよかった」と今だから思えることをお話ししたいと思います。結果的に試験に合格しましたが私の場合は、はっきり言ってぎりぎりでの合格でした。理由は2つあって1つ目は1次試験の教職教養の点数（自己採点）がものすごく低かったということです。当時は確実に落ちたと思いました。解き直しをした際に4択問題のうちあと2択のところまでは合っていたところが多かったです。もっと1つ1つの内容を正確に覚えるべきでした。どうしても暗記では知識が浅くなります。試験対策になりがちですが、教職課程の学びを自分なりに知識化する過程として学習するようにすべきだと感じました。

2つ目に1次試験後から1次試験の結果発表まで面接練習を含む全ての学習を止めてしまったということです。1次試験に落ちたと勝手に判断したことが誤りでした。1次試験に合格した後あわてて面接練習をし直しましたが、もっとコツコツやるべきだったと後悔しています。皆さんは途中結果がどうであれ最後まで決してあきらめないでください。合否を判断するのは自分ではなく、採用者側であるということです。

教員採用試験は、筆記試験と人物試験がありますが選考試験なので受験までに合格到達点まで力を付けておくことが大切です。人物試験とは、面接のことです。これは、人物重視の選考試験です。学生生活で何を学び、どんな活動をしてきたのかが問われます。その関係性を教員としての視点でつなぎあわせ自分のものにしておけば相手に分かってもらえると思います。私が合格できたのもありのままの自分を評価してもらえたからだと思います。まずは、どこまでいつまでに筆記試験の合格到達点まで実力をつけるのかです。大学受験のように毎日一時間でも学習に充てる習慣が大切です。これは私の反省から言えることです。大切なことは継続することだと思います。やれば必ず受かります。

頑張ってください。

大学生だからこそできるやり方で合格へ

堤 裕太（理工学部創生科学科4年）

東京都の教員採用試験に合格するまでの体験を述べたいと思います。

東京都の一次試験は、専門・教職教養・論文の3つです。予備校などは一切通わずに対策を進め大学の対策講座と自学自習のみで対策を行いました。

専門科目は、まずは過去問を解いて傾向を掴んでから、あとはひたすら大学受験の時の問題集を繰り返し解きました。東京都の数学に関して言えば、難しい問題を解けるようになるよりは、定義などをきちんと理解しておいて、全範囲の基本的な問題を解けるように押さえておく方が大切だと思います。

教職教養に関しては、薄めの問題集と分厚い問題集を一冊ずつ買って自習をしていました。薄めの問題集で全範囲を忘れないように毎日やりながら、時間があるときは分厚い問題集や過去問題などで頻出分野を強化し、苦手をなくすサイクルを続けました。自分の専門科目と違い新しく覚えることも多い教職教養は、インプットは自分でコンスタントにやって、アウトプットは対策講座に参加して色々な種類の問題に触れることを意識しました。勉強をしているときに痛感したのが、大学の授業などで意外と教職教養に触れる機会が多かったということです。真面目に教職の授業を受けていると、教職教養の勉強がかなり楽になると思います。また、時事問題などは新聞スクラップをやりながら、その内容について休憩の時間に教職仲間と話し合うことを習慣にしていました。これは、最近の教育動向を踏まえた意見を二次試験の面接で話すことにもつながるのでおすすめです。

論文に関しては、小金井相談室の対策講座が始まる時期(2月)くらいから始めれば間に合うと思います。教職教養の知識などが頭に入っていないと書けないので、まずは知識をインプットしその後執筆練習をするのが良いです。ただし、配点はかなり大きいので、最後の2カ月くらいは毎週教職課程センターに過去問のテーマで書いた論文を提出し、添削してもらうことを続けました。自治体によって出題テーマにかなり傾向があるので、よくでるテーマに合わせた“型”を作ること为目标に論文の練習を進めるといいと思います。

次に、東京都の二次試験対策についてお話しします。

東京都の二次試験は、集団討論と個人面接です。私がこれらの対策を行っていく中で特に大切だと思った2点についてお伝えします。

第一に、経験をできるだけ積むということです。集

団討論も個人面接も、圧倒的に“慣れ”というのが重要な点の1つだと思います。慣れていないと、個人面接では自分の思いを伝えきれなかったり、集団討論でなかなか意見が言えなかったりするものです。1人でできる一次試験の対策と違い、人数が必要となる面接・集団討論対策は、大学の講座を存分に活用することをお勧めします。私は、一度だけ単発の予備校の面接対策に行きましたが、高額な料金の割に、内容は大学での対策講座とまったく変わりませんでした。大学の講座で物足りない人は、教員採用試験の対策を受験者同士で集まって無料で開催している団体もあるので、そちらにも参加するといろいろな意見をもらえてさらに自信がつくと思います。また、経験を多く積む中でとても共感できる意見に出会ったり、伝え方のうまい人に出会ったりします。そのような人たちのいいところをどんどん真似しながら、本番で実力が発揮できるようにしていくとよいと思います。

第二に、自分の意見にデータを付けることを徹底することです。これは私個人の考えですが、問いに対して自分がどうしたいかという意見を考えたら、自分の意見を強化できるような根拠となるデータを頭に入れておくとういことです。これは、集団討論と個人面接どちらの対策としても使えます。受験者の中には、講師経験者や話に説得力のある人がたくさんいます。データを根拠に意見を組み立てるのは、経験のない大学生の強みを増やすための作戦として効果的です。データが見当たらない場合は、自分のお世話になった先生などに会いに行き、迷っている考えについて意見をもらうのもいいと思います。面接では場面指導についても聞かれるので、そのようなことに関するアドバイスをもらうのも効果的です。

今、振り返ると教員採用試験対策で得るものも多かったと思います。

教員採用試験はひとりで黙々とやることが多いのでどうしてもモチベーションが続かないこともあります。教職の授業などを通して仲間が増えていくのはとても楽しいものです。高額なお金を払って予備校に行かなくても、教職課程センター（相談室）に通って、仲間と意見を共有しながら学習していけば必ず合格できると思います。ぜひ教職仲間と力を合わせて頑張ってください。

大学推薦特別選考を活用して

岡部 結衣（生命科学部生命機能学科4年）

私は大学推薦で相模原市の中学理科を受験し合格しました。今日は、私が教員採用試験に向けてどのような対策をして何を目標に学習してきたかについて話し

たいと思います。

私が採用試験に向けて学習を始めたのは、3年の夏休みからです。その頃は過去問の分析をしていました。しかし、3年生の秋学期から研究室配属があり、実験が忙しく教員採用試験にまったく学習する時間が取れなくなりました。そこで、学習が進まないことに焦り、2月から予備校に通うとともに、市ヶ谷・小金井の教職課程センターの採用試験対策に参加しました。一緒に教員を目指す仲間とともに学習することが刺激となり、モチベーションを高めることができました。

大学推薦は筆記試験が免除されますが、相模原市から大学推薦特別選考の受け入れが決まっても、教職教養の勉強を続けました。それは、教職教養の学習が小論文対策や面接試験に役立つと先輩からアドバイスをいただいたからです。

一次試験は小論文のみで合否が決まりました。小論文だけの一次試験でも毎年数人は落ちているため油断はできません。また、相模原市の小論文の出題は、場面指導を論述させる独特なもので最初はどのようなことを記述することが求められているのか、自分でもわかりませんでした。過去問を解き、先生に添削していただき、修正することを繰り返すことでだんだんと自分のものになっていきました。

過去数年分の出題論文を一通り書き、添削していただいた後に、次は先生に予想される論題を出していただきました。このことで一次試験までにいろいろなパターンの論題を記述することができました。多くの論題に挑戦することが自信につながり、本番でも慌てずに出題されたテーマについて書くことができました。

二次試験は面接が2回と模擬授業でした。面接対策、模擬授業ともに教職課程センターをフル活用しました。面接では、仲間たちと一緒に練習をし、他者の面接を見るのがとても勉強になりました。最初の面接練習では緊張で声が震え、これではダメだなと痛感しました。一次試験が終わったらすぐに二次試験です。このような状態で大丈夫なのだろうか、とても不安でした。それでも、周りに励まされ、経験豊富な先生方に見てもらい、だんだんと形になっていきました。

私は面接練習の経験と反省を踏まえて、「この質問にはこう答えよう！」と面接Q&Aノートを作成しました。このノートは、自分の考えを整理するのにたいへん役立ちました。時間のある人はノートを作ることをお勧めします。

模擬授業は、10分間で題材は自由でした。どのような題材がよいかピックアップして先生に相談しました。模擬授業は、市ヶ谷・小金井教職課程センターの講座に参加したり、研究室の仲間に見てもらったり、同じ予備校に通う仲間の前で授業をしたりと限られた時間

で、できるだけたくさん練習する機会を作りました。先生や仲間たちからアドバイスを受けて改善していききました。さらに時間を計って本番さながらの練習をしていたので、本番でも自分らしく、落ち着いて練習の成果を発揮することができました。

教員採用試験を振り返ると、たくさんの方々の支援や協力があったからこそ私は合格できたのだと感じます。特に二次試験対策を一人で練習することは難しいです。最初はだれでもうまくできません。練習、反省、改善を繰り返してやっと自分のものになっていきます。あきらめず「教師になりたい！合格するぞ！」という強い思いがきっと合格につながります。しかし不安に思うこともたくさんあると思います。その時には教職課程センターなど法政大学には私たちをサポートしてくれるシステムが整っています。みなさんには、それらを活用して不安を自信に変え、合格を勝ち取っていただきたいです。